千鳥掛

樂圓逍遥記

貞享二年夏

かなつちを家毛多勾のおりいわり
麦稈帽子をうるわいうすゑ
二つしくさするかすタ蒼く　　知足
うそさき神をもみ多紀　　相菜
伯多れく月まの油つゝし　　叩端
うまとそのう林の尾おと　　業言
　　自笑

個人研究費
雲英末雄
58- 2045

（ウ）拾ふてつとよう（さ）廉さき　め風
念力岩をもとほす　お伝
みち此人乃雪ま一喝（カツ）の至　重根
手元の悪き　落葉を投むし　蕉
守宮を守るかや　足
箸ふかるる　八百の浮　葉
袈裟迷ふ妙蓮ふ　塲
多くの（これ）数乃月さ　辰
なれの秋すれ（イニも）　相（イニ足）
描初めそ初ふ春もそめ　風

多幼妙手當と安それとみて　佐葉
初ふそる　命を（イニ）つそそ手短無をそふ情まそ　辰言
衰はふふ妙常（イニちやり）ふ法　蕉帰
了ふまふ勅手直してまるふく　足蕉
五月乃風のふ　雨ふま　葉信
葉ま夢まふふふの後ふ　塲凡
手元の面半ふ名ふひ　辰笑
（右十二句不入之）　栞足

千鳥掛 ○

貞享四年冬

[illegible]

呼ばゝ答へ氏
葉
[illegible]
[illegible]雅章卿
[illegible]亜相の[illegible]
[illegible]
うち行しをも
[illegible]

呼出の[illegible]
[illegible]井筒屋[illegible]
[illegible]

京まではさかうち地吉の
ちとうもも[illegible]
小捨[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

芭蕉
葉云
知足
如風
安信
自笑

○張華翁経曰遠鳥来依止長則反喩其必
○推子法副曰鳥名猶有反哺況人而无孝心

二ツ二ツ友雨の弱きつく

のりのいふらふ 仮もしう立

落ち葉かきめ

(全)つ
淀いくとせ綿をひとつ 芭蕉

北のすみ別の 笑

かこうをそくる部の後 おさし 芭蕉

髪ふる触のゆきふをつくる

月を痛めく なかぬなり 風

詞笈のおもたきを五月のあ

ふのちあふひ 仕

談ツキ二十二章
(養子)
(舎)杨枝

貞享四丁卯年
十一月七日

風吹て余ありとの分ひ芒あやふちるふ宗祇

早稲の香を分ち芭蕉

あるふ小物のまを延ふ 安信(一本安宜トアリ)

簗しのするれて柿を植うけて 自笑

あるふ小物のまを延ふ 知足

響の夢初月のかのうかり 業言

おもうけ 如風

一里乃雲毛川上ふ　重辰
祖仕ると門をもこる　云
布をゆくと心をなふ　芝
うしみれてきすて　伝
数的の音やふつひを　風
月をかるる　螺貝の海　蕉
高根を中をこうそ林の実　笑
わうをめするふ　風
高作る和行のなの会と　芝
布はるの(全)ゝ杉のなね　伝

海辺の星ゝ貝ゝ二ツ
ゆうべの雨を洗ひ
ゐる

(ミヨ)庶
涙これを原に対をこれり
己のそもそいはる
幸(ヒル)螺(ホラ)ゝ油ふうゝ氷
角ある層小化粧す　露
称月のゝを食ふく牡の内　蕉
称もぬるゝ枕あるゝ　風
死ふくて死ゝふ視ひるこむ　伝
扉子ふゆゝ(三つ子)ゝの　芝
式日のゝかるもきてくせく　風
はるゝ来のゝる川　辰

採千に頃ろ多すみ
笠もてあふつ笹やの子
和ふかての蛭ろ子もひ
すきさまく荊 初しく
好者をにきと酒の着ん
赤ろふしく 矣
氏人の衣を多き出ろ
かる花いくもれの 出ま
田をかをのふ山の名を
裏のかふ酒を
ち立ろ

笠 矣 之 屋 衣 矣 ミ 笠

十坂の女ハそれの名かはも
たろかきろかをさ
胡蝶ふろまれて
ゆくおろ 坂のとかけ
多ふちる一ま
あふふろもの彩のか除
ろあもま表
動走 衣をそふ多ろ
解活 神庄心
ちかちを名のかれあれ

笠 笹 、 笠 笹 笠 笹

大蔵一覧云僧田ウ
旦優婆塞

（ウ）すこむ　金撰集歌

伊勢内宮外宮之間ニ離宮ヲ設ケラルル事アリ其ノ所ヲ指テ云フ

内外乃乃小川　つらゝゝ

既ニ立冬ノ節ニ

一枝のちるより秋の使いのり　風

雲の小鹿そ鳴なる　白

生そふ松もふかうつ　良

衣かしちるもぬるゝを惜ふ鹿　風

こゝ秋雨を　高

雲を招や山ふもとに　白

虹のこゝめいろ日の　角

志月そい淀多を研ル白雪

三ツ四ツ庵の窓を明ル　嵐雪

野ゝ〳〵と軍ふ竟ル角　風

おとさぬふこゝもなた　角

擂粉木ふ明ゝ乃雪ル　良

かこゝ　志

春ゝとも花咲ル　白

浅ふる黄濁小菜を洗ル　良

札焼ゝ力こゝのはゝ　風

我ゝ寒を屠ル　角

絶句解　山斎牡丹　李子ニ難

西山風雨錦渓寒　春色沈ゝ酔ニ牡丹ヲ
不ニ見ヲ故人姻露ノ艶ヲ　那能萬戸病中ニ着

貞享三年
九照
秋

蜻蛉の羽をかる雨ト哉　沾荷
海苔うる
雪汁の椽を打音の格子哉　其角
磬すこし雲こそ
かゝれ
八月朔日の雨なる
霧沾
ホの笠をかや
山もそも孤ノさゝくく
それもひとりと酒盛しし
芥

橋もみち狂なの中ゝくと落て　高
京のうれいさそふおとゝん　雪
ねそふものむ人ノ留主哉　公
眉ぬく袖ノ笹竜ふつもよ　蓼
かゝのつゝなるおもてもちやまく　良
ゝり雪雪ふる　久ち
氣さい笠屋よ松しなれ羽　角
行やれくてしお焼ぬ浦　風
相生ノ松ひゝ花と松　蓼
車をおりくそやまゝ　角
ゝ

貞享四年乙卯

甫とて西京を面うちこの
うたゝ時雨るゝ竹うれの音
萱葺のこれ蓋を掛もせて
人の生うつりとて新敷
古郷ふ土重のかもん雪一重
柿本のふかふ今ふ好る

如行
卯塘
雨考
桐葉
市雀

夕すゝみふ翁の
しうれ小鯵ふ
路傍を探り柿すゝて
みふ〳〵桜を
頭うれうこの
はゝ焼ゝ
柿の生うつり
深うれうめ
みゝうのこう
早春を風

沾
荷
葵
沾
荷
沾
葵
荷
葵

工山
棟樓
独吟
行
指
芳
茶
苔
山

八四指を折るよ
なんでもよい

座元さくるんよ
しばらく御ゆるしを
るくさぬる筋をそ
みやよ　立出申す業平
うつつなるをそよ
火るこる

又しても忘れぬ月あり

ことの葉を世に

生ふし行くその

ふ筆の跡をいとひなく

お十二ふるまで

ふ筆をとる筆綵のごく

新なお未だ

始めのまま修

立秋の前を古

乗りて

月ふかく

義　　卿
樟　　陰
陽　　明
ふ　　ん
茶　　香
義　　卿
石　　谷
坊　　城
樟　　陰

上巻六月の末の方より稲葉山より歌仙三巻の連句を始め
二の表の三句目をはじめとして後のちもしばしば
ちらつきし引合一座

おなじ

色くみまくも

雪折ふるまを

まん丸な月

ふるのまま

おもしろき

卯　　槌
相　　系
（三月）
玄　　梅
東　　岱
（弦）
工　　山
周　　竹

枕に住吉の松ちかき岸辺なれば
けしきよりはじめ
きしるして
かつをよぶ
枕に良夫おとこ
枕にあの舟をよべとおとこ
さの舟
程なく
枕に双もふくべを取る形の如
舟をかく
枕にいとうつくしき月の下
うつくしき
月のあかり
枕に扇のうらうつくしき
イヒトラシクアルコト冬ノ白ノ処見ルベシ
扇の
山
うち
系
笹
枕
語

枕に馬にこし掛つゝ紙の筆
詩
枕に唄をも
山の
系
笹
語

雪の日の石ふるう
栞 〻 雀の
松に
松と石との川のたちくまおかを
砂川を
松に絵ある牛を小
鳥ある牛を
松のもろこし人を
乗物のやうなもの
川柳の出好あふ
うつくしきを写
筆をふ花の
注うし 松
第ふ酒
うの

芭蕉
由之
其角
枳風
文鈴
仙化
魚児
叙

貞享四年
仲冬會
十月十日

鶫（カヤクイ）
鷸鴣の心か 雀のたのみ
粒をうつ句 山陰の鈴
叩あて（金）芝をの
新し 雪庭月
中の軒画工一連
鐘鉦 〻 たう
漢（カラ） 舟

續虚栗 四十四

秋垣色深き波のそま　金路
齢（よはひ）とやきこり若松　光雪
（イニ數トモ）
酒のこふさかなの（イニモ小）　牧雪
初月の雲を抱く（常陸佐波山）
鏡つく袖つくそかり（ヨヤ）　阿川之
筏（フタ）一雲ふかき　杭南
月も波ん治（ヲサ）まるを待（ツ）　阿
月も波ん治まるの　筆人
篭（籠）つく句をも　錦化
おりそねるを　雅
（ツ）
（ヲ）
（ヨ）
（ヤ）
（ヲサ）
（ツ）

途中をたてる車の（イニモ）
沖こくみるよ小波
花ふぶのつく波のそ　之
列そ　雪
（ヲ）
（ヲ）
（ヲ）

起ておもつかんほのそら
そらぬ雨雲を軒ちかみ
軒もそぞろ物思ひなり
小机もしめりあるかな
筆の穂先を酒債(サカテ)とたこる迄
つゝう字を蛛(味)よぶ
意のこゝろおもふ
職うたて　氏
雨牧神(ポン)笛吹かず
侘うそぶく　独ふさぎ
秋

雷
そ
軒
机
迄
蛛
意
職
氏
雨
笛
侘
独
秋

堺の海　冨を
浪もや詩在中のなふ矣
衾もむ　海苔をそふ
谷海ふ(ふゝ)りはそ
声(ふゝ)れもの

角
雪
そ
蕪
白
之

晞(ヲリ)く
あゝまゝ
ふむ
花の雨(サキ)のこ
まの山

貞享四丁卯 秋

露沾

芭蕉

沾蓮

千角

露荷

沾荷

傘の骨をかくこうもり

糸むしの一ト声ふかき夜の民　全「氏」

星ひとつ折ふしむせぶ猫の声

ねしづまりたるこうたふ

むら立て月おしむなる砧かな

髪ある修行僧ありて

恵をこふ　全「に」

鐘会のおくふかし

しら菊の黒き

月きうくと立ふる事や蜂

あるを法ふるく鐘頭しくる

芭蕉

露沾

沾荷

沾蓮

其角

露荷

沾荷

沾蓮

其角

花咲くくるる事や

額鏡柄ふる頃の月　楊

行脚僧もやらの降のまよふ

磬うつ月ふかうる

橋のもとふる文

才子のゆきつけよ

物うけいたのひあるふ月暗く

松のあらふ

こるをおりて野猿ふ　全「をのこ」

水鶏扣戸尾上をたゝく

沾荷

沾荷

沾荷

沾蓮

沾荷

沾荷

沾

湯のあるふ箱根のいふく　　沾蓮

大口をあき　　雪　　芋

うく（金さ）一本ふく姿の露を　　沾荷

牡丹をふを　　つゆ

一（ウ）軸も形ふ連ふ絵ふ雲　　雫荷

名を花ぬを紙のたくも　　露沾

西ふく漬ふむをさいつぶ　　沾蓮

みくをのふかく　　沾荷

（筆）襖絵ふそれふ家の　　芋

物のふ花すくかくふる　　雪

（をく銭）（たの後ろよあう）おさおて

負笈四千釈年冬銭別

江（エド）戸に行ふくいふくそたいくはる　　句銭

旅宿のもふふこのふ　　負笈四千釈年

貝をふくいふくも　　（十三日）

弾くいふくの肩ふ　　芭蕉

ふふ雲ふいと（を）　　嵐雪

松ふり梅ふ（ふ）　　其角

沈（ウ）の柱ふく始ぬ　　蕉

みれとへ帆のふ　　子

（句銭お二）　　角

句銭お　　雪

世の事を画よ　子
蛛うかりけり　蕉
形こそ小袋の切のもろくより　雪
ゆめをなきぬる　子
二枚重ねて　蕉
一妻に　君
苅代事　子
雪の窠　雪
雑宝　蕉
夕月　子

皇子四年冬

志賀の山路を　雲裏の
一羽ゆくもの　一羽
枯牛ふいもくれて　杉江
里おみなのとぼし　蕉
月ゆくおのれ　馬
秋寒の　秋
家の糸　蕉
雨ふることを　桜の
蕨　蕨
夕薬　風

伊勢三郎

旅の空妻子の便りほろほろと　苔雫
秋雨ふるをかなしみの文　秋雫

志ぐれふる路ゆく人の蓑白し　雫白
小雀の集ひをつぐ人雫
村雨ふれる納屋をこのうして　雫
家をこぬ沼の山吐月
路をふふむ新の声　雫白
蕾の蝋めも　雫
ゆきもどし文　雫

雑炊をもいそぐ嫁の名をよびて　雫白
傘二ふえゆく第　白
石原の土ふみの杖もどり　蓬
路地ぐちをくぐる乞　雫

○夏ふれて雲のいづもの　雫
夕鋼鳴る納屋　雫
村雨ふる　雫

寛喜四年冬

前大納言

めづらや雨ふる野への草木
旅人の衣もほすべき日和哉
帰京の人多き時
車のゆきちがふまで
秋を経ぬ雨ふる雲のたゝずまひ
矢口の渡の風の涼しさ
かへし
重房
白妙の

貞享四年十一月廿四日

みそらあるじ（侍）

ゆきのはな

唐土かうもせうしの雪のそれ　芭蕉

ふしぐ〜庵のかりまくら（全さびゆく）　桐葉

附ぐ〜小生涯ゆきぐ〜

京橋こうえう山　〃

秋それて用ふる器も一つ哉　〃

はつふゆもいつしか寒きころかな　〃

団扇の日ぐらしぬぐよ

なでおろすをもまたず行る

旅て後も早菊小包いたし給へ　荷兮

いつさう（一笑）のものおもしろみ　〃

雪汁のまじりもやらず　等躬

あさの露の花ぐもり　〃

日雨小ぶりをまつ　〃

貞享四年九月廿五日うつしをふくとふるまひ　あるじの名代の為仲うち
廿日廿五日京都よこもりをふさぎ　まいあり〜て　をとづれをとふをり時に
京にをさまよひまゐり〜ふさぎ　即伊賀ふるさとのおやめふうとのをくりものを
さつまいもとて　あさの露の花ぐもり　ふけとはれ〜ふるあめ
いひくるゝ　中略の内　いちとりつゝ宝方
の名月を

節句をまつ　荷兮

市ずまいもの〜ふるし　〃

日雨小ぶりをまつ　〃

秋ウ　さゝ波を神楽かな　　係力　　春
　　さゝ髪の里ふる　　係　　春
　　門ごとに酒のもむ声　　係　　秋
　　やふれ玉の垣　　係　　春
　古畑そこなふ猿の　　係　　秋
　　ねらふ声や野もる　　係　　秋
　　雲門の小径　　係　　秋
　　高ひくき林の風　　係　　秋
　　夏虫よ蛍よ　　係　　秋
　　能申楽の舞　　係　　秋
　酒泉を　夢てふ人もすき魂

ふるさとを
　旅人のうらをうて
一本は雲をくうひゆくし
旅人と（イニ見）名をやはし（イミせ）心尽の（イミのもし）名
　苔の
の池の水城を刻みあく
　春ふるうるを
小坂つゝ羽ひゝ
　秋の
秋の校を経ふ村
　霞ウ
先こゝうら夏の
秋のころ。

如秋
春
相春
秋
春
春
秋
春

湖水風の行
狐の子等
屋やうに月
先ぐるる
二ウ娘
ちゝかゝ様の
味のうるふ
正行か横
音を和ん
花さう文
結婚かう
。

風　笠
言　仁
蕉　辰
仁　風
言　是
雪

十蓼等の第七ゑのふたゝ歌仙
半をうつしたるものゝ
連衆ふるの名ハ

志ん行ゝ空ゝ稲ふ山　蕪梧
ふ行ふつゝ雨ゝ名不　蕉
駒の蓼ゝ地ゝ　笠
蚤のおゝふ仁ゝ　越人
有の秋ゝ人ゝ　蕉
ふゝゝ面ゝ入ゝ　舟
雁ゝまゝふゝ　水
芥ゝふゝて行（ゆく）ゝ村　梧
神（カウキ）ゝふゝ　蕉

分人　笠　泉　梧　水　泉　人　分　水　笠　泉

秋の日

真享五戊辰七月廿日

於 糸美 行 水

屠所連

栗稗の
中ふる雨や
蛸の口
月の松風
一升
蚊人
胡及

本のまゝちる桜のまゝを詠る

つてまちかねるその後も

遠ちく故の詠る命を終

ふるまでも　有家

ふるつをきゝつゝ　虹橋

死てなをまつたらまつるこ

ろをわすれぬ　今井

篁をくしそゝ帰るかのこゝろ

ふかくしてふかき　人丸

ころ後の之歌　及川

雨をすかしてみるのこゝろ

日和　金七宗

ふるまでもあしのまろや

ふるつをきゝつゝ　虹橋

ころ後の之歌　及川

切の篁おりそけをこゝ死久　等

ひろくの香かをうつす月の影

人一代の命をこゝろ　有家

元禄元年 二

春

侍宰よ角力のおもしろきまい
常にこゆる事のたのみ
秋ふかく初潮こそ大悲
夏ごろもうすき青色のもの
雨さえ松のみどりかな
閑中芳香のあるもの
夏いちさ印あるもの
ゆふしほの香ある
えつてこゆる時の
香の新水をまつ月の夜

雪 角 雪 角 雪 雪 角 雪 角 雪

家蜜ヲ船ニ遠今ヲ山ホトトギス

一ときわ波の咲ちて
り秋よりあり昏暮やそ秦
お宮かふかきもの弱法師
お医者さまでも物流さ
鮭をさくとおり
枕娘ごもの叫入
如雪ふる夜の雪もむごう
雪の宿ぬもの
夏ごろ実ノ頃ぬ
雪秋晴のごとまる

雪 角 雪 雪 角 雪 雪 角 雪 雪

牛のよろこたせる市の中
江湖 秋雲の 田を 陸奥
ふるさとの 山も 今ぞ月の 秋
いつくにも 月の光は 同けれ
物たらふ 心の 秋の 夜
すんをみひらく 小窓
一ふさの 石戸をさそう 小窓
こゝろも 神の つゆ 夜
栄をも 未来を 悟 それの 句
こゝろより 夜

文雪九年二
陸奥子曽〇

文政三年
秋江余所翁を
訪ふ

秋風や人をさそふて夜更ル
まるいちこ秋ふかしと梅(佳)の香
ひるま干布団を吹ふて夜更ル
明ル中ゆく川ふねの月 蓼
(イニなすこと)
(文雪九年二秋中重ノ部ニ雅を)
雅すること(イニなすこと)ありてめしい 桃
良

（イニ眉ユ白ゾノ）おいて（イニ笠ヲ）みを（イニ木ノ）入る
（イニ麻ラレヌ）こゝろ（イニノ）合
（イニ雪ヨキ）ところ
（全ニ笑ヒ）ところの
（イニきく）
（全ニ今ニ）のあるもの（イニ笠ヲ）
（イニ岩ノすきまより木の下ヲ）
（イニ岩ノ苔ノ生ヒ出ヅル）

（ホクロリ）北六の里日光山今市
伝所の茂る処昔志
鬼を葬り陸奥国へ
まの者を勅して蔵めおきて人を制禦せしと
雪の積れる
（イニ雪ヨキ）
（全ニ笑ヒ）ところの
簾おろし
きぬぐ
あの月も
寒き夜
（イニ麻ラレヌ）
（イニ雪ヨキ）
（イニきく）
（全ニ今ニ）のあるもの（イニ笠ヲ）

（イニ眉ユ白ゾノ）
（イニ麻ラレヌ）
（イニ雪ヨキ）
（全ニ笑ヒ）
（イニきく）
（全ニ今ニ）

蓑 翅梅 良 桃 蓑 良 桃 蓑 良 桃 蓑

物語ふけ（イニ笠ヲ）
（イニきく）
（全ニ今ニ）のあるもの（イニ笠ヲ）
（イニ岩ノすきまより木の下ヲ）
（イニ岩ノ苔ノ生ヒ出ヅル）

北六の里日光山今市
伝所の茂る処昔志
鬼を葬り陸奥国へ
まの者を勅して蔵めおきて人を制禦せしと

物語ふけ（イニ笠ヲ）
（イニきく）
（全ニ今ニ）のあるもの（イニ笠ヲ）
（イニ岩ノすきまより木の下ヲ）
（イニ岩ノ苔ノ生ヒ出ヅル）

良 桃 梅 蓑 良 桃

元禄二己巳年
奥羽岩城須相楽伊達ノ辺ニテ

風流のうら見もとめん四種ノ図　芭蕉
いちおもてに我まつ桜　等躬
あやめおるうばのうしろの栗ノ下　良
簾(スダレ)青き一系して屋敷かり　蕉
扉(ユイ)ゆるす柳川柳　彩
　　全二日座

雪丸集ニ採入ル秋風ノ巻
雪丸亭
信夫ニテ

みちのくにて元禄二年
洞のやかたにこもりて
こゝろをやはらんと
雪ノ巻ニ採入ル秋風ノ巻
みちのくにて
ふるき代のみやこの風雅
いまだ奥羽の道に
残れる事を聞て
いかでこゝろざしはべるに
幸ひに
此の国の
風流ニ
あこがれ
給ふ
人々
あまた
尋来り
給ふ
ことの
嬉しく
て
日
数
を
経
る
ま
ゝ
に
先
ず
白
河
の
関
を
越
え
て
安
積
山
の
あ
さ
か
の
沼
を
尋
ね
て
須
賀
川
の
駅
に
等
窮
と
い
ふ
者
を
た
ず
ね
て
四
五
日
と
ゞ
め
ら
れ
ぬ

発句
聞ク
ニ
及
ビ
テ
ハ
ベ
ラ
ズ
ト
ノ
ミ
ニ
テ
ハ
ベ
ル
ニ
ヨ
リ
テ
ハ
ベ
ラ
ズ
ト
ノ
ミ
ニ
テ
ハ
ベ
ル
ニ
ヨ
リ
テ

卯の花をかざす関の
こゝろもとなき
風情
なり
けり　曾良
（卯の花をかざす関の
こゝろもとなき
風情
なり
けり）

なのめり上流と佛ふ弟をくみて
学をゑのつやと添ふ
ある時を師のへぬん
樟(クス)の小枝を高くてて
うえて小姫う角の
哀時う山やーー
酒りう小筆をさて言ふまく
材をそうそうしし修
文う彩乃聖つきなる床の角
鴻のう仏を注しもる 日

並 那 乞 並 那 乞 並 那 乞

いろくう彩をもみこうわて
日ゆるおわうをつなゆふ
山うの屋めおうそんむうふん
弁わるうう清めう
彩彩名ゑ一弟
おのくし武士乃
年そうめうその
えめめるれくうし
ちまうおうお統を
ゆゆうの学ね

七夕

並 那 乞 並 那 乞 並 那

文孫二仲吾
嗒山旅窩之

[illegible]
[illegible]
[illegible]

箱
山
蕉
良
山
箱
良
蕉
嵐蘭
山

良
蘭
蕉
良
山
蕉
蘭
山
良
山

○

詠うたをも仏なのしあるの加今よかうさかけて
狩乃書して
多ゝ佐
多ゝ佐
多ゝ佐

梓弓矢の根乃家をかゝみて
彩雲をとゝめし谷の秋の夢
松歯茶吹るたもとの露
酒のこゝろをしるさゝ栄かな
智入の琴に和しし虫
忘れておもふ紡織の聲
衆しさを称ゆるもおさなき
月乃如みをこゝろえ家
独しめ会酒もり
笠乃跡をする芦のうら枯

蕉
良
雲
等
衆
舫
雪

1

柳のおく和泉や堅の岩の
うへの谷水汲て
ある程の茶をもとめもする
多勢さまぬ是迄の
き離をいさゝか
如月琴乃稽古
神無月三社乃
宗会まもなく

蕉
良
衆
舫
等
蓬
雪
衆

雪九首
出羽五歌仙。
參議
篁

大石田二乘平齋亭ニ

さゝれをあつめ
笘(篭)をつゝみ(つゝみ)もり(もり)
瓜そゝけいさゝか(かの)
ほをむしろ(むしろ)に(に)
牛のよゝ(よゝ)ゐる(ゐる)
雪をおりぬ(ぬ)き(き)
雪(雪)の(の)
(雪)

(杭)
(木)
(月)
(水)

出羽五歌仙。

參議篁

大石田二乘平齋亭ニ

さゝれをあつめ笘(篭)をつゝみ(つゝみ)もり(もり)瓜そゝけいさゝか(かの)ほをむしろ(むしろ)に(に)牛のよゝ(よゝ)ゐる(ゐる)雪をおりぬ(ぬ)き(き)雪(雪)の(の)

(杭)一栄
(木)
(月)
(水)

(封)
(宿)

健全を祝よう山おろし
れもしおらしい同
明二の年号ハ(イニ錯トアリ)永万ニ改元ス
等く全き大、
堂の名をおろう
瓜をうりる双六の石
を物の篇に見の這入く
物の人ふ告
かうそ年る
ばうてとくそ
ひおさる

火
良
蕪
當
良
水
當
蕪
多
良

花の後をおすす
称もし営む己
探勇村を陰世
刀持すす甲

當
多
蕪
良
多
當
良
蕪
當
多

薩垣人をそ
ものそ容め前
星系かこそ
象を柱女の名
康命を等
第うお

當
多
蕪
良
多
當
良
蕪
當
多

合歡

神ぢ〻咲本陰を色のそひて

多ゑ〳〵かもと（金万）

古里のなつと枕を妹こそ

てを海する泰ろ

君こそれ帥をの市のかこてこそ

すそ北のをるの宮

亡人をおれ寝ぬ

やりあかしのまろ（金二岑の花）

年つゝ登まねる

山田の根をいそ

（金二）

旧黒山南作之於
六月四日

珠妙寺鈔此篇与
四入江君鈔与
約重花阪
舎兄如何

（金二）

有明も君をこそ

往ね人のむ

川毎乃強よ

（金七）

鵜乃死ぬ大

嫡塗

（仁二李谷）風の音

霧丸

菅良

約雪

雛妙

梨乃

（金四）

山羽立歌仙。花ざくえ二

眺てハ (つゝ) 重なり行さく
石と計旅をあるの年 返
山をそこうふ城乃紀をもむ
分ねをも称 杉本き 言
雲のみの泊 宿 ひ 雲
をうこぬ松をはとなく 鬼
古佛伝をふかし学校署 翁
家たち校 の蔵 爲
月とよと川紀 の 言
繁あふするの 翁

おもてなのひとり
的場のまち山吹 (カリ)
まを訪七つの
消くくく 碑年の水
見川うこうかき
かきのふ二 初春ふ
二紀消美 地名
つ下高すう 山の声
うた名ふ椿の枝
浪多の雪 加湯お

同 (四)

九 君
君 翁
翁 九
九 言
言 九
九 翁

文保二年

出羽新

此巻八雪舟筆ニ非ズト云フ孤雲老人ノ書

言入九雪翁小倉

雪舟

嫁ゝ
手拭(ふき)
すゝれを
三おもさうる
浪の名ゆゝ
名ゆゝぬまの
萩咲ころを
(イ二中二さし)
ゆう月を
社(やしろ)
ゝゝと

蕉
保
言
(全て)
ぬ柳
木陰
風
柳
蕉
言
保
陰

ちゝ
かを
たのしひと
栞(しをり)
神(かみ)
ゝしの
先(まづ)
武士(もゝのふ)
自(みづから)
おもふ

蕉
言
保
陰
風
柳
蕉
言
陰

出羽酒田の濱伊東玉水亭にて

袖之浦　江上晩望

おつる山や浦を包て夕涼み　素英
海石かる磯の苔路　不玉
月出て雲をかしむ酒もりく　ソ良
古船の竜乃ふむ蛸焼　意
京しそわふきそふ茶の毛　玉
霧の玉を吹ふ　良

柳蔭
風
瑞
意
泳
風
柳
塔
言

今宵の移り行くの
火を見つゝて
物思ふころもあきの
松風おとすき
後の秋かな
この冊子(ども)
多つの書架の
ものゝ
いのちの

延
玉
良
玉
延
良
玉
良
延

(伊勢)

かきあつめ
おもひの
ありしに
ふみこめ
別れつゝ
枕をおさむる
和哥ふうの
えひそのきぬを
遅しの
月

延
玉
良
玉
延
良
玉
良
延

御廚入道前太政大臣家の屏風に、秋の歌をよみ侍りけるに、戒の師

家の前の萩の似るまでに（金あ）ちるめるかなと毎

ふるさとの秋を今年も

萩の露

うらびれて

聲ぞ

この

山の綿みまくほりて帰る
蓬(蓬)ふかみしい人の
菓程を口をの夢
うつゝをうつゝを
赤椿を毎のゝ
花年おそ小田
け村まつの松松
敲ものみりくひ
まぬくいねかつも風
若のゝ如くも

[illegible]
[illegible]
[illegible]

金山や僧子に紙を拾ふ暮　右
秋のもしを浄法乃高　也
うつゝ也百首の魚名を後　蕪
人いてうしの声なし　良
杉松のれて木しの高なし　雪
るを秋も山ふる　秋乃末　蕪
御所書や行を切る　右
行古の月　山ふ間　也
杉はむく元の乃姿　蕪
ちれて森の時ふ年迎や　雪

也　
右　
良　雪
蕪　
良　

賀新宅

文保二年九月
萩之露

八日 社家小伊賀の
一世の寿仙ありしが
逝るを知る我心ともて妙の
ふさこゝろまのあらんや

一 二もとの萩の方そ
むしのねの露を
我袖もしぐるゝに
おしみたてむ 内の
萩毎やいろ〳〵の彩を
含のすまゐそ
おもほゆ

坂面
菜夕
白之
秋枝
文保
口良

よこなるふみあるつゐて
より消ぬをまち物
乳をそ 時(シヾキ) 月
こゝろ 和名抄歌(シヾキ)
みる家にそゝぐ 始
時のふこゝろ玉の 露
糸うりて 枝
あ多ぬしをそ 山
なの声 口
をそうるまそ 流生
良

如柳
小枝
菅名
流志
泉
蓬
枝

ゐぬきて人ふる年も雪久乃音
咲みくのみす時乃なく
焼(たき)そのくもゐはし砂乃
あれまくしてめよかまい入
葉よ荘のそ(イミ)ふく久
月え和もきく旅の客来
作乃くく乃奥指ふる布袋
地栃をくさきの衣れさ
松(たき)くのそう風ふ落をれん
飾り埴れあるゆいおまくみ

夕
亜
木田
松
之
蓼
亜
因
松

亜賀ゑ若さつゆねをれ
そ乃葉そと行あくる高
め月や高ゐ甲もおるくて
あしゐみそう春のゆそ
笠まそうゐみ(仕)ま
ゐそうゐみ名をくくも
ぬそのひて新し後乃かこ
指そたひくこひこ
そそさい能ゆそのひくく
来そうへあかそも

之
蓼
夕
亜
松
亜
蓼
之
松
亜

文保二年七月廿六日 詠之

園をうく緒しまもおきまの　蓑
おもかくる入日　夕
夕月夜　言
うつくしれ秋の歩ゆふ　松
谷さしみ新緑をのぼや　夕
をも辺老の如林あり　田
おもおくる春を胡砂　之
春もかくて　蓑
寧す遠をうまる　夕
小路うう　雪

如くも如くも紀の蓑（イミヤ）
為うかすよ明く
月をを猟かも山
をぬうひうを行
わの隻宿の
うかをめうう馬乃一

志ゐしふの名ゐも小行燈萩すゝき
家をうつしてうそうそ月
(うそ晴る)
猶の雪消しそめき秋のおもしろ
すゝきおもてをかすめ夕等
句雪也烏賊めそ
おもしふ家しのかれ一もれ
波おもふ孫子おもも美を絵
東海元乃岩をうしろ

誹諧 小杉 等外
荘生
志摩
夕市
秋巻

○字彙ニ以蠶而小偏ニ日ノ字ニ作ルハ非ナリ

曉の朝

今ノ條

今ニ同ジ

訳

翁

校

京

校

訳

翁

爲

訳

翁

ト

市

校

爲

訳

京

校

文孫二枝箱を送りこゝろ山中温泉の旅舎にて両吟

馬ぶねを並べし比ひの忘れ草　小枝
月をと角力ふ稽古のまろね哉　智月
錆をしをゆく日の名残ふ撫の雪　枝
栄ぐ（金）こゝろ冬の情を　意

炭売や伊吹吉野の雪ぶり　叔明
砂ぢくりをぬる我をの初　智月
いつの鳥帽子ぬぎ風に　誰人
城ま中ぬかるおもてを　〃
ちりをうつてお月待ちぬ　叔明

枚
京
燕
枚
京
燕
枚
京
燕
枚
京
燕

和泉守の松の御…
小倉百人一首（伊…
庵廣八重名月の…
百首歌奉りし折　松…
和歌の浦に仙人の…
あまをとめをそゑて…
仲秋の夜の海辺をおもふ…
雲の上を…
海路遥かなる…
雁集へと…
…

文政二年春月…
伊賀哀…

いにしへの雨走り…
おもふ…
初雪や…
雁風…
…
土芳
半残

元禄二年伊勢山中　青鳥

桔梗（キヤウ）や　巻のはなれ小萱（イニ）を

巨燵　ぬきけり　風かをる

酒ぬくめ　かゝるも　秋のこゝろ哉

秋かぜ（イニ草）の　記念（イニ草）の　七ツ　部屋

裏の　七ツ　部屋

もさびしのれを　ものうき

世の中　いきる　業　品

秋　風　ぬ

無　為　風

品　芳

妙

無

元禄貳年三月三日

納涼のおりから和漢

月ゟおもしろき

砧先ゟ彩やゝ夕涼　芳秋

黄茶ヲ蝿避ク烟ヲ　素堂

合ー觀醒ムニ馬上ニ

かさゝぎの小田乃高ふり

月ー代ロ見ルニ金気ヲ　蕉

露繁添フニ玉涎ヲ　芳

多紀　芳

いとおもしろき

田圃（ヲツミ）の稲（ヲ）

家しらぬ

年のよる旅　蕉

品

柚（ユ）

品

芳

蕉

鴻（ヲヽ）

芳

品

唐詩選　飲中八仙歌
張旭三杯草聖傳脱帽露頂王公前揮毫落紙如雲煙

張旭三杯草聖傳　脱帽露頂王公前　揮毫落紙如雲煙

幅(ハバ)を正(タヽ)ふしてより　掣(テ)筆(フ)驅(ル)倫(ニ)嵐(ラ)

ぬまふあふのまるお壺屋

ふ(ノ)ゝ(ノ)ゝ(ノ)ゝ

霧籬顔執與　老
霙浦目潛喬　蕉
帰るとて立ち寄る竹の雪　老
つるれ縄の除夜と知らず　蕉
山伏ハ山　平地　雪
門一番ハ門　小天　〃
鶴鶴窺ニ水鉢ヲ　蕉
雲ふるうちて明あやめ　堂
奥ふかき和風の香を花を見　蕉
臨ラ谷ニ伴フ蛙ニ仙ヲ　堂

元禄三年
上巳霊まつて京

ゆき雫秋を五水
雪ま土民秋仕物　杉風
ちぬま苔の付京雪く　凡兆
雨の松ちらお楫の雫　ち雪
かまくらの月好人　素桃
村ま一紀新史ちの高　乙州

京へ入る

里ちかく好き馬引き出し

たしてうて夫（大）

まかり出る 俗

白川や茶を煮る外も

ちまちも 新

浅黄手屋形

猫なきいろ外声も

上へうつる

うるしぬり

史邨

玄哉

二

芙蓉

北枕

妙

桃

芙蓉

乙

好春

邨

北

来

桃

芙蓉

小

来

邨

桃

京入口の景 朝の景 焼

まだ浅き

動きそめたる

馬ひく 馬洗ふ

茶筅（トヨス）つくりの

月をかしく

ちまちも 新

おなじうしろ

書きうつし

特新

九（丸）

文徵四年

近江

正秀

夕刊報

文治四年
八月廿日
月之宮

[illegible]
[illegible]
[illegible]

元録四年未秋

やまくとも
ゐをうまをてゐ
じまものおて喰を
踊ものを
ゐ御
ゐ
ゐ

正則
於江
繪を
葦秀
兎苓
正秀
則
を氏
を五
敦

元禄十年

初夏や茂き数寄屋の茶の水　紫苑

茂き　濁点

散るを惜しむ名木の桜谷川　岱水

江戸

雨ふりて風の音聞く夜半の秋　史邦

月を惜しむ人に心の残りけり　芳菊

名月や池をめぐりて夜もすがら　曽良

旅寝かさなる宿の小萩　晴

秋風の一葉に見ゆる初もみじ　重成

風の香や分け入る法の奥ざくら　柳流

手折らば残る白菊の露　成秀

植ゑ置きて秋をまたるる女郎花　法立

我が庵は月待つころの姿にて　香

細めく　そそぐ細の

文政四年九月

深く交わりほとんど
一ともすることを
志す契約内より
らくの次を
半ばまれて碧雲
すくして気を
志す

孫通
昌房
玉秀
聊任
乙物

為
篤
那
菜
為
水
篤
菜
那
為

元禄 庚午 五 己丑

芭蕉

ふん月や小うるさき小菜小

嵐雪

吹あけよ吹あけよの雪それ

〃

吟ぬ暁のうき吟もあらん

芭蕉

七類山を一ふく月

〃

附つけ菜の名を加えよ

雪

秀しもろく湯するの血

芥

其

好

房

刀

角

刀

徑

物ごと毎に光る毎いて
[illegible]
其句は古句の新らしきを取りたるか古の句を新らしくするか古の句を借りて作りたるか
其の俳つく神
生ひふりえたく
月ふれく初る
まこふる塔の紀行
洞ふ[illegible]をよ[illegible]
古(ふる)相(あひ)の念仏を
小城を稲つ
林くつ
いひ明(あか)

雪
蕪
雪
蕪
雪
蕪
雪
蕪
雪
蕪

ちる[illegible]
このを[illegible]
分つうさも
いつみのか
紫[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
發句
共つら
[illegible]

雪
蕪
雪
蕪
雪
蕪
雪
蕪
雪

山茶花の落ち残り梅つぼき　蕉
雪年籾おくる頃　雪
屋もりをむしろの岸八軒家　蕉
前つまづく小石さむき　雪
陣深夜客ゆえとのの重のおそ　蕉
初宜う行手に　雪
雪もり飽と物好りぶん　蕉
ほこほこと田を深う　春　雪
赤人もいま一しきり　頃
つづく唱を家の頃色　蕉

梅の中帋

南窓一弓春と為す

久々や出るふくと和尚達　去来
旅ある友をはげまし　蕉
明を信仰ぶかの高掃除　千角
（イニシエヨリと口きる）
月もまてとの一弧の沈　嵐雪
波のうたいう西の上　蕉
秋の雨　蕉

年過ぎし母を偲びて
名月や故郷遠く妻子遠く　雪
焼灯を大きくしたる侘寝かな　角
山茶花の散る音聞くや侘寝かな　来
世の中を寒く生きたる侘寝かな　翁
侘寝して明日の事を思ひけり　角
侘寝して人のあふぎを借りにけり　雪
行く年や侘寝の窓の白みたる　来
おさな児の吹く大の声　雪
軍の加減いかにと侘寝かな　角

古郷や臍の緒に泣く年の暮　来
旅寝して見しかの花や雪の上　翁
月雪とのみ人の詠めけん　角
小督おもかげや仮寝の夢の通ひ路　雪
丁稚ふたり薬の袋さげて来る　翁
義仲の寝覚の山か月悲し　来
義仲の寝覚の里や月の出汐　雪
義仲の寝覚の床や月の友　角
月影や四門四宝も朧にて　来
冥加なき身を恥ぢ入る月見かな　翁
名月や池をめぐりて夜もすがら　角
名月や海に出でたる雲もなし　来
名月や畳の上に松の影　翁
名月や門に指し来る潮がしら　角

ここおくる庭の
日をも時を経さ
きりくといふほの
並べ陶さ白の彩
いつとをあの
にひろあるさ
それつもうそ
おこつふまけぬ
絶まれて笑
なるを葉乃

侘うて行るこたぬ
ゝくとある 淀 多の
多堂ゐ城ぬを仮ま
ちひさなのタ
高ひもをを内の
山のふ下
多郎のそ八旅の
ゐのゝもるゝ
好多も烟の玉
ひとりのねのそ

冊 凡 隣 素 蕪 冊 凡 隣 素 蕪

ゐうくこのゝ
初多名山ゝ多ゝ
四月の末ゝ別信の
ぬれ多ゝ候をこ
多郎酒多ゝ
みゝゝれをゝ
けきゝも刈上ゝ
まをゝ今別ハ鞆
張梅ゐゐゝを汁
乃年ゝをゐゐ

冊 凡 隣 素 蕪 冊 凡 隣 素 蕪

元禄十年丁丑冬
十月二日 詩六章奥行

文をも詩をも俗中ふ物ぐさにて
雑煮ばかりを小つゐ
粉つゝし毎朝おなじ
順礼をのがれ
まゐ八階をのぼりあれ
西遊のみち 晴

青雲をおもふ弥の迂
萩の
ふるさとの琴、琵琶
八月を経ぬ
雑煮山 こゝの

蕉 仁水
六 爭
芭 六
水 芭
蕉
六 爭
芭 六
烏 芭
蕉

お紀を島もとれの本
頼りの 卿
まゐ 仁者
当座をいふまで
まをと語一
相をまゐ
姥のみめ
山寺おく
兒をも
扉ひらかれて

水
蕉
六
堂
蕉
水
蕉
六
堂
蕉

い
れ
も
の
を
段
を
の
く
も
の
を
の
小
方
お
も
の
も
の
孤
も
の
の
も
の
も
の
百
姓
の
も
の
も
の
も

杏
蕉
山
陽
青
邨
蕉
陽
音
蕉
音
山
杏
陽
音
蕉

壬申歳暮

世の中をいとふ心ぞ

小俳諧

其角

酒壺
舍羅
何中
蕉
園
仆
川
亭
窓
中
窓

東陸奥日

蕉
園
仆
川
亭
窓
中
窓

小うるくふるをおふる
[illegible]の社[illegible]のそ
月[illegible]
枝一[illegible]をうの
地[illegible]
花のちりに[illegible]
[illegible]ちき[illegible]
[illegible]
田の中[illegible]
柳の[illegible]

[illegible]
老
[illegible]
中
[illegible]
川
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

松の実集　文政廿年

七十をあまりて
三尺ばかりなる
添ひ
陽もる年の
すまふ男の
おひつきなどの
おふをとりて
田の中にて
ふをつくり

花の時
侍る
ふまれ
ふまれ
ふまれ

贖を蒐。

元禄六年

九こと毛板くもひおしくも
境のうものめいの事坊をめ
まいめよ松もも松とうの雲
くれ毎うの雪くく清水坤
府縁千雪をを一印楊仕義
義をととうまもて家く
窮所も彫かうする林家う
おうとすて今丁外月のを
口くそいて外酒をんうる
わるかけくの多のうく

坡　義　坡　義　坡　義　坡　義

十府の里仙臺北東
の方二里半あまり
街そこうかれ入し
家ひもの名所と

咲とれ千十府
とも菜多もつ
ともくと清まの風
地のうふまの月
ひをくうるくく
中れみをひ府吹
一板り綿りあり府秋
うみも彩雪のとう
おそまを学ひ中多作時
むうまれ学翅
義　坡　義　坡　義　坡

蛾人ふ(イの)残ばかりの田舎
うばこれも六月のすゑ
一つ二つ見初めしまゝ
ゆくへなき幽境の地乃ち
沼多のちまた
梅はさう色そもそもす
秉中秘松の図
伊勢の松ら乃いそもそも
上博乃木彫合
沼也のまゝは八つ乃なり

化、来、化、来、化、

各月のつゆたゞ
一ぢてもるゝ松の印判
○玉ゝの信徒ふ
ふるまをもう松の風
古松ふ乃ぬ
点ゝやる
此句をゝ
雪雨う初うて
辛国ふるゝ
移住をゝて

芭蕉、来、化、意、来、

元禄七年
洛柿舎乱筆

柳小折ゝ初茶葉　芭蕉
月に松の陰を早そうる　洒堂
雪柳折そふるゝ枝の程　去来
塀ゝ外ゝ石垣　文考
自動乳河水ゝ　犬卅
小鍋ゝ物ゝ煮牛　素牛

月ゝ松の陰を早そうる
雪柳折そふるゝ枝の程
塀ゝ外ゝ石垣
自動乳河水ゝ
小鍋ゝ物ゝ煮牛

未
化
、
未
化
芭
素
化
為
素

侍
イニセ
金二ヲ

上野の事ども一つ二つ洩し
申候 入手御覧
おこゝろ安く
たゞ乃新年小祝
申迄かしこ
たゞ御行末
降もしも高のごとく
思ひ
共疑ひ
無之候
恐惶謹言

堂
蕉
来
秀
牛
堂
朴
来
堂
牛

月花小袋入ノ
筆跡を
物を
新年のごとく
うたの
道を
待ち
新年一通
侍ら
進じ
高野

蕉
堂
来
堂
秀
蕉
堂
牛

華礼乃終て師走
来
考
蓬
等
牛
来
考
来

文錄七年

雪花

文政七年
餞別

新麦（イニ麦）

まことおうのそ金子

馬時（多七）

四五千石新まち

方〻警まを引

おとう

山居

其角

風雪の孫ふう莽（多）

百の曲り日をさいふ

炮烙のうふ苦し蠅の足

雀をかりけもの門

切まてをうそく峠

お誕の二月

うそをお祖の行

神おかれふおうこ

笑をり二富（掛）

折ひいふんを

海

芭蕉

川

芭蕉

川

芭蕉

川

[illegible]
[illegible]寺社等建て
[illegible]き[illegible]
蓮生上人をやめ
湿乃ぬぐ[illegible]
耳成う[illegible]便(仁仗)
命[illegible]
雲[illegible]土着[illegible]
[illegible]
神[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
基材果[illegible]
[illegible]
いそ[illegible](仁)
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ね二童の志そ(十四の)ものがり
そもなこの神
行り 翁を又めまれし
鳥をおれくゐ
日光くさんそ
くれくそのむ
名月庵そのあ
初ふそやそ
むのすそ
なれそる

居
菊
居
菊
居
菊
居
菊

芭蕉庵小文庫

帰よ(十二の)
数そ林を稲乃こ
夢おかよ名油乃郷を
松市そ人乃名
市乃事一
二階そこの

史邨
そ菊
伐乃
邨
菊
乃

ことに栄のうを吟ずる
ふ所なれども、ふ孫
手ずから（仁雄筆太）採摘して
味かうをもちゐぬかを
孔子もの家ごとく
林入時の箴言
塩漬の法つきてあり
手紙ぬ成しまいれも
物ごしのあり利刀を
土焼ふうきいう
筆弥む一事ふ
小性のうれ三月
ふうしむ嵐穴
馬の糞かく役も
夕暮ふ法度をふるごとく
ことなきまうに
掘うてふれと好物
けあうの味望ハ
和名ひうまく底とう切とも
石屋うまで取うまぬく

（嵐雪筆八江倉山推量ありて小作ハ何物ぞ一弗物うふうかすの多きみうし）

邨　翁　多　翁　邨　翁　多　翁　邨　翁　多　翁　邨　翁

引さき土佐林のこゝろ
雲まろがれぬ峯ハ
いたゞ雪ゆふ日の光
夢をまもりて暁の
松にこゝろをとゞめ
陰ふかさゆる岩こすゝ
小雨雲淡こゝろ
二枚三日たゝ
老ふたゝ
老ふたゝ
石收徐心 旨

多邦 牛歩 翁 多 邦 邦 多 邦水 翁

元治元年 望九月下旬
活茶室之時

牛流れ村乃はちきや五月雨
書棄 ゆき如 栂檜 ゆふ風
二枚 むこゝろ 林押倉
栂 こゝろ古 松
自ゆふ花の海嵐のこゝろ
焼初こゝろ田乃水 一本こゝろ

調井
きま
こゝ
雄逸
文卅
文秀

東
井
然
明
芳
蕪
井
来

鳥叟道

元禄七年　大津出吟

多念をこゝに掲げ何乃答へ
如く妙味乃かゝれ常住さ
ちく衆乃
佛種を植ゑるに
探ゝら抜度
八部の神ちうこく仕奉り
来益を結乃ずもちろく
西京清水地蔵
村雲ゟうちふ當者乃衆

芳　然　意　事　芳　然　意　芳　然

結ゝて納置
ゟ
ゟ
ゟ

イニ等を
作りてさまざまの
竹のそうまを和
名抄に出
あり
ます
大八のそうの
ほそきの白きあり
ます

梗 ニ桔
桔梗 小秋
猪牙

毛蓼
竹蓼
土芳
杏芝
猪鈴

草袋
九節
芝
翠
松
金秋
金秋
金秋
金秋

煙蓑を目利の
ひてそそるや
大木の楢を
助ふ麦刈こと
山伏をたふと
一里ばかりも
勢ひの百姓
百姓やどふ
軒の雪
うらうらと
雪

蓑
芝
麦
芳
籟
庵
芝
庭
芳
麦

笠法山の
とそもそも
今日の西
のれぬや
柴うふ
今年の
もぬ山
雪ふ
雪ふ

庭
籟
庵
芝
麦
芳
庵
乱
芝
蓑

もけうれや月ふかき

長髪のいとれを引

ゐひきる形そうあり

白ひとるなをそうき

芳

麦

芳

藏

妻子よ花見ゆ

みをはうよ 様

晝のなをもしの

島

なの

人

仁

壬生山家一

文政七年六月廿五日

今下記

イニ訂正

翁千今行也小年の

笛のる 将ふあう

一つもし初の為

まそう刈し四

面の名をなもし

統坤つまふ帝の

百第

弐之

なの

牛

村鞍

槻市

額

元禄七年九月四日 探丸子興行

吉風 小春風を [illegible] 支考
月 [illegible] 垣ろくへ 猿蓑
町の門 [illegible] 通もしらぬ 素堂
きてをゆきあふ [illegible] 雪芝
二十日よ [illegible] 時雨 [illegible]
この山 [illegible] 草袋
蕪村 [illegible] 庵ハまれなり 支考
年ふ [illegible] [illegible]

[illegible] 村
[illegible] 常
[illegible] 意
[illegible] 之
[illegible] 額
[illegible] 意
[illegible] 市
[illegible] 常
[illegible] 村

ウ

そもす緑の
嘯の声を
結合と失楼の
ものを餘
大工を招やの
月の方
きいつを
新をいふ

然
芝
意
翠
貸
然
芝
貸
然
翠

二

月ふまる
ひとり
咲をれ
向をつけて

二

幸と猫の
月を
名物の
二つの
山をる
日

然
軽
然
貸
然
翠
意
翠
然
翠

雪ふる
根ぎし

元禄七甲戌年